

### 3. 単純X線検査の実際

塩入 弘和 東京都立小児総合医療センター診療放射線科

東京都立小児総合医療センターは、「こころ」と「からだ」を統合した医療を出生から思春期、成人に至るまで一貫して提供することを運営理念として、2010(平成22)年に開設された(図1)。小児がん拠点病院、こども救命センターの機能を有し、病床数561床、外来規模750人/日、職員数914名で運営されている。

診療放射線科は、放射線専門医3名、非常勤医3名、診療放射線技師23名(非常勤6名含む)の組織で単純X線、歯科X線、骨塩定量、造影透視、血管造影、CT、MRI、核医学検査に対応している(図2)。

当院で行われた2013(平成25)年度単純X線検査の検査人数は延べ4万608人であり、これは診療放射線科全体の検査人数の8割を占める。時代が進み、モダリティが進化しても、単純X線検査はメインの業務であり、多くの患者が検査することを考えると、放射線科のイメージを決める検査部門であることは間違いない。患児、保護者の信頼を得て、放射線科検査への

協力を得るために、その対応には細心の注意が必要である。

#### 固定について

小児のX線検査では、安全で適切な固定は最も重要なファクターである。安定した固定は正しいポジショニング、撮影タイミングの余裕を生み、最小限の照射野での撮影を可能とする。患児を安全に苦痛なく固定し、適切な撮影を行うためには複数で分担し、迅速な対応が必要である。最低限2名以上で対処し、年齢に関係なく1名は常に患児の側から離れないようにする。15kg以下の乳幼児胸腹部撮影時は、必ず固定台(日興ファインズ工

業社製「ファンティックサー」など)を利用し、正確な正側の撮影を行う(図3)。

ペルテス病や先天性股関節脱臼などの継時的な経過観察や、荷重、運動負荷の関節撮影などは再現性向上のため、定型の硬質スポンジや固定具を利用する。荷物の緩衝材に利用される気泡緩衝材は、苦痛なく適度な圧力がかけられ、透明なものを利用すれば、手指骨など細かい部位のポジショニング確認も容易である(図4)。

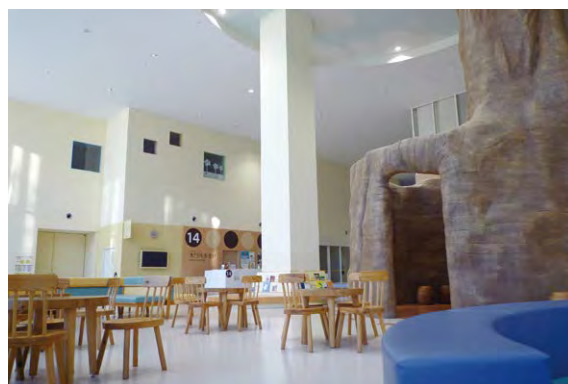


図1 森をテーマにした当院外来待合



図2 当院診療放射線科受付カウンター



図3 乳児用のファンティックサーによる固定